

中西美沙子 [教育コーディネーター]

# 大丈夫よ! お母さん!

～傾け合う心～



私の愛読書に、「悲しみの子どもたち」があります。犯罪を起こした子どもたちの心の悲しみを優しい目で見つめた本です。矯正施設にやってきた多くの子どもたちは等しく、親の愛情に飢えています。本を読むと、時代が家族や子どもたちを息苦しくさせていることを、つよく感じます。

「白金も黄金も玉も何せむに まされる宝子に如(し)かめやも」。これは、万葉集にある山上憶良の和歌です。昔のことですから、病気になるり亡くなる子どもも多くいたでしょう。そんなこともあって、「子どもが一番の宝」と、心から思ったのでしょうか。

今は、子どもにとって幸福な時代です。医療も生活環境も、憶良の頃とは違い整っていますから。でも、「宝である子ども」を虐待する親が増えているのは、ふしぎなことですね。

可愛いはずの我が子を手にかける親の心理は、どこにあるのでしょうか。ひとつに「親の愛情経験不足」が挙げられるでしょう。子どもは生んだけれど、どのように「愛情」を注いだらよいのか分からない。子どもへの思いはあっても、それを形にできない悲劇ですね。でもこのようなケースよりも、今一番、私が恐れていることがあります。

私たちは「幸福のカタチ」をどこに置いているでしょうか。私を含め多くの人は、「白金や黄金」に心を奪われているのでは。働くことは、「生活の保障」。でも過度の欲望を持つことはどうでしょうか。現代人の多くは、「白金や金」に、心が引き裂かれているように思えてならないのです。

現代を生きる人たちの不幸は、自分の今在る条件に満足できないことです。

子どもを育てることは、自分のしたいこと、「オシャレ」や「友だち付き合い」を、少しセーブすることでもあります。車やブランド品、ダイエットや美容に関する情報



## 中西美沙子プロフィール

教育コーディネーター。執筆・講演活動の傍ら、文章教室「スコアレ」・画廊「キューブ・ブルー」(浜松市中区元城町)を主宰。文章教室「スコアレ」では、小学生から大人まで幅広い層を対象に、ただ書き方を教えるのではなく、「この時代をどのように生きるか」を見つめさせるような試みをしています。お問い合わせは、TEL.053-456-3770

ホームページは



著書の「ピアノシモでね」(東京書籍)は、中日新聞に連載した人気コラム「つかまえて!こころ」をまとめたもの。同著には、親子の問題もいろいろ描かれています。(税込1,500円)

＝お求めは浜松市内の谷島屋＝

の氾濫の中にいると、欲望を満たさないことが不安になります。自分のしたいことを我慢することは、苦しみとなって表れます。子どもは可愛いですが、自分のしたいことを優先させようとするそのほざまに、「虐待」があるように思えるのです。

「男はつらいよ」の寅さんのセリフ。「庭一面に咲いたリンドウの花、あかあかと灯りのついた茶の間、にぎやかに食事をする家族たち、それが本当の人間の生活ってもんじゃないか」。このような場面は、夢物語かも知れません。しかし、「あかあかと灯りのついた茶の間」を懐かしく思うこんな風景が、家族の原点であることを私たちは忘れていています。この灯りを灯しているのは、「家族の心」です。その心は、互いの心を傾けあうところに生まれるのだと思います。幼児は、まだその心を育てていません。親の思いによって、「心を傾ける人」へと、子どもは成長していくのです。

以前このコラムで「おんぶ半纏(はんでん)」のことを書きました。赤ちゃんを背中でスッポリ被う着物仕立てのものでした。この「おんぶ半纏」に関する話を聞きました。「85歳の老母が包みを解くと、中から銘仙(めいせん)の着物のようなものがぞいた。娘が嫁に行くときに持たせた『おんぶ半纏』であった。子どもを二人生んだ娘は60歳になろうとしている。新しい家が出来て荷物を整理して、この半纏を見つけた由。『どうしよう』の問い合わせに老母は、『送って』と言付けた。懐かしそうにその半纏を見て、「寒くなったら部屋着にしよう」と羽織って見せた。そんな話でした。

柔らかな時とは、些細な出来事できています。そんな思いがする話でした。子どもを育てることの楽しさ、もしかしたらそんな些細なことに心を傾かせることではないでしょうか。心を開放する自由な感覚は、そこにあると思えてなりません。